

日時 2018年5月27日(木) 午後2時30分～5時

場所 文京区立肥後細川庭園集会室 松聲閣洋室 B

出席 22名

坂学会総会に引き続いて坂研究会が開かれた。

1、「鎌倉の切通しから坂を考える(その2)」

担当：渡邊一夫

昨年(2017)7月以来数度にわたって鎌倉の坂を実際に歩いて来た。また昨年8月の坂研究会で取り上げた鎌倉の坂のことも踏まえて鎌倉の切通し・坂について考えた。取り上げられたテーマは以下の通り。

- a、鎌倉七口は江戸時代にいわれ出したもの。
- b、7つの切通しと街道の関係(街道との繋がりはどうなっていたのか)。
- c、峠と坂の関係
- d、古道としての切通しと現代の道路の関係
- e、鎌倉の切通し開削は鎌倉の都市機能の一環

2、坂名の変化・転訛で読み解く「関東の崖の坂名」

担当：松本崇男

日本には崖や崩壊地名を意味すると思われる地名は、「小豆(あず)」、「埴・壩・儘(まま)」、「野毛(のげ)」、「圪(がけ)」、「埴(は)」、「埴(くれ)」、「麻布(あざぶ)」、「粗毛(ほぼけ)」、「崖(ほき)」、「岨(そわ・そば)」など、豊富に存在する。

一方、関東地方では崖地形をハケと呼び、「ハケの道」(東京都小金井市)、赤パッケ(東京都板橋区西台1丁目)、狭田道(はけたみち・東京都板橋区西台)、パッケ下(東京都新宿区戸塚町大字源兵衛パッケ下・現新宿区西早稲田3)、岨之下(はけのした・狭山市大字谷保字岨之下)等の地名がある。ただし、地名・坂名には特殊な例があり、ハケ=崖の意とは限らない。例えば「ハケの道」(東京都小金井市)は、国分寺崖線のがけ下を伸びる道ではあるが、「ハケと呼ばれるようなところは往々にして地下水が湧出しており[水を吐く]意のハケ(吐)や[水がとどこおりなく流れる]意のハケ(捌)という認識も命名の根底段階から複合的に生じていたかも知れない」(楠原佑介・溝原理太郎編『地名用語語源事典』東京堂出版)との指摘もあることから、坂名の検証も注意深く進める必要がある。

崖をハケと呼んだ例(ハケの坂・ハケ坂など5例)、崖をパッケと呼んだ例(パッケの坂・オッパケの坂・赤パッケ坂など3例)、崖(ハケ)に「タ」を入れて呼んだ例(ハケタの坂・ハケ田の坂など4例)を、さらに変化・転訛の例として、崖(ハケ)がバケに転訛し化けの字を当てた坂名(4例)、崖(ハケ)がハッケイに転訛し縁起の良い八景の字をあてた坂名(3例)が具体例として取り上げられた。

それぞれの坂名を地形と坂名の関係性、坂名が地元でどのように伝えてきたか、いつ頃の呼称か等、地図・写真・地誌を用いて比較・検討された。

取り上げた坂名の中にも崖（ハケ）から変化・転訛した坂名と確認できない坂名も含まれているもののハケ・パッケ・ハケタは崖地（ハケ）の坂名であること、化け・八景はハケの変化・転訛である名称であることが説かれた。